

苦難を乗り越えて Surviving life's hardships

February 13, 2023

By Airman Jarrett Smith
374th Airlift Wing Public Affairs

ある土曜日の朝、ジョーは友人たちと、一週間のハードなフットボール練習の疲れを癒そうと、ミシシッピ川へボートに乗りに出かけた。

誰もその後に起こることなど、知るよしもなかった。

乗っていたボートが川底にぶつかるなり、ジョーは後方に投げ出され頭を打って意識を失ったのだ。ようやく目が覚めると、激痛に襲われる中、友人たちが泣きながら「ジョー、足の感覚があるか？動かせるか？」と叫んでいた。

レジリエンスの基調講演に登壇したパラリンピックのメダリストのジョー・ドラグレイブ選手は、「あの日、人生が永久に変わってしまった」と述べ、「変わるはずもなかったアイデンティティを突然失ったらどうなるか、また、どうすればいいだろうか」と聴衆に問いかけた。

2月7日、横田基地内のシアターで行われた「プロフェッショナル・ディベロップメント」の新年度の始業式で、ドラグレイブ選手はチーム横田のメンバーに、逆境を乗り越えて人生を切り拓いてきた自身のエピソードを語った。

ドラグレイブ選手は当初サッカー選手を目指していたが、その突然の怪我で夢は叶わなくなった。どん底から再起するための希望がなかなか見い出せずにいる時、その思考のスパイラルを断ち切って現実目に向けてためには、周囲の支援を得ることも必要だと聴衆に語った。

「医師から、また歩ける可能性がわずか3%だと告げられた時のことを覚えている。3ヵ月間の入院の間、毎日、隣にあった車いすを見ては、『車いすの生活は嫌だ。絶対に受け入れられない』と思って過ごした」

再スタートの人生が送れるように奮闘したが、一人では限界があった。彼を支えたのは、支援制度や新たな夢だった。友人や大切な人に支えられながら、新たに車いすラグビーを始めたが、13年間続けてきたその道のりは容易ではなかった。

「2016年に、コーチが私をチームから外した」と、人生の主軸を失ったことを受け入れるのに苦悩したことに触れ、「“(車いすラグビーを)続けたい、どうにかしないと”と鏡の中の自分を見て、言い聞かせることが大事だった。前進できたのは、“こんな人生に意味などあるのか”と頭によぎる声ではなく、支えてくれる人たちの声に耳を傾けたからだ」と振り返った。

彼は、攻める相手もいなければ、誰のせいでもないことに気づいた。そして再び立ち直るには、周囲のサポート、努力、そして愛情を信じるほかになかった。

ドラグレイブ選手は、レジリエンスを人々に伝えるため、自分の人生を語ることにした。どんな困難に直面しようと、誰もが立ち直ることができることを自身の経験から伝えたいと思ったのだ。

第374空輸航空団のグロリア・ブライアント地域統合予防事務局長は、「ドラグレイブ選手がここ(横田)で、自身の強さも、弱さも語ってくれたことに感謝している」と述べ、「困難があったとしても、立ち直って、成長できることを知らなくてはならない。逆境から学べば、より強い自分にもなれる」とドラグレイブ選手の講演を振り返った。

